法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-27

小塩

年譜

14

次第
花になるゝ嵐のきくやまそろ
ぬらん
ワキ詞
是ハ下京邊ニ住居する者にて
さても大原野の花今をさかりの由承
こゝろづき二人をさそひ今大原山へ
と急き候
サシ
春ふかき何ハ明ぬる
く花も今ニ成のあるかたなる山の花

さくら　上ニ
今をさかりとて花のいろ
ぶかの神と一しほふかきこゝろ
てゝ
ちりてもつちにまぢるはなのゆくへ
そんく　三ノ年
ちりてゝ花をうれ
神ちぶるの世のはるをしらん
すて
そ

ト
のとかなるひかりそ花さかりく　ワキ 挿て
大原野の花さかりせん色しるしその中に
ござふ年ふけたる老人花の袂とさく
のてこなてふかみのをかいにあり
けりたきこ那ぞいりてまい
シテ 我いらすや貴賤の中ふかた
我

てこゝろなけれどものつかさこ山に
の見みておもひせぬ花すきそとおもひ
かりくもよすゞしき山の色なる
うつろふ心は花にかきはこそあれ
かなしかりける ト おもしろきいはれ
ともがらや此身八十年のくらき

ごとしあらはれのごとく春もきたる人ぞ
志すゝとむかしいそ　ゆかり甘る成
年の春まてぞ由しふはこら毎
てぶらふ中へあつにしこそおもゆくき
と加くら毎へ　好と加らん花さり
ぶ宗をよこみ久くき　さはいつい甘い

面白や　昔にかへる王すむ代々
ぶら石ふけし大原や　をしほの山の
小松の原よりてぶつくみすれ出山さく
雲ハ形も成安さく　白の中に成楊
見さに　めくのさ千す日も全方丹の
加にみの　花の　風へ　ひてのへれ

みなもとのあつまりてきたりふるまひ
ざるとあるべしとおきこえたりてきたれば
つるがはのほとりにつるのみやをつくり
かまくらどのとなのりをあげたりし
ときの代しるしをあらはしたり

ひるがへすみなもとの奇いたるをもて
のこりてふるきたる代の事をもひろめ
あがめ奉りたるこそいとたうとけれ
行綱奇しきこそ　ひとつはつるへは奉
行事あるべきはずの事なれ
ふるしきがうけたまはりにのみ
と申すにて代の事をしらみしとなり

かふつけて秋のころまでおもかしてあめ
つらね錦の色かはらん人の身のつまもみな
らぬあきらけす　なにとなき身の上ながら
くのかりて此世のはかなさもしれ
我こゝあそれこの身かれこそなけきて
ないなりてなけきていつそなりけ

なる　萩にさいの色て萩にさくなる
くてのん中のみてころあかりけすこと
おもろきはとて身かれもとこふら
ぬ花の夜ふなれて色こ御涙ん
また見て御それかいくのころつきれ
花の枝　かいくるまてかきりん

かざしの神代のいまごろてのあれけ
ころふ　きせんの花見ん　ち車の
花の雲をさしつぎてころはいさ
そこはかとなくふかきこころのつきれても
花をゝしみのうらん　くもまちにほのゆきすと
かけろふるれおほらけのとみへはぎ

かりく　　さてもそのかの神代の大原
和光のかけふかゝり神れ誓ふかいてく
広まさいとれすこつりふかふそて
世ハの窓もみのめしぐれいりちを見る
も花ぞみるとこちはれみちのへぞを
ときてはとまらぬかきりく　　月見る

ぬきとめし山したかせの秋風をまつの
影もなし　ゆきもふる今まてふる
ちりてなほ花の人まちのほとゝきすへの
のあけぼのあれはつとめすなるらん　宿る
をよろこひなか花のすゑといろにてちる
しぐれの柳やなぎの袖をぬらしすゑにわかす

とりとめて　ゆふ霧の山まつ松風
あらんはなりもせて　ちらさりしくる夜
さ夜とも　おもひそいはゝ　花とも今
同
なふかすゑのこは雲とさゆふなきしゝく
さこすゑあらしは花よりまもしてなほせ
しらぬ今いのちの花に雲もみなちりてそ

の二人のさそかなしれ御幸まて花見
車をしはし月の花よ御ふよ
されはらん世に一とはいせんをしるも
ふ世いて名の月ふひけ釣ゆへきこへて
三条河原より　昔は事いそてりの名在
あへき秋ふひとき人しるけれは

ぞは昔へて人言みに此名は其の
ゆう昔はららうされての名もあく
ふかまけのさや　曲　ぞすう野れらひ
されのすうして名あふのみぞされかもう
名らすりし緑せてふみらぬの名あふ
ならされゆへみをまんと昔ふ秋の野く

みつらみしも山されのたふらみ多ふ
そのしまてみいかしらてさらあれかし
ほちもあまはそうつしきあうひそそ
おふしれわくもてしいきまてをれそう
月のみこそあれゝひし山さねと見あや
のちそあれ人のいふらん　山うば

くらいあやきこそわか事のつきしそ
まり秋と又こすかはあかきまやと
かふゆくからいちのゆらいあき無
常れそすまのやかもあはいしもかこ
そとくてふ　山しおか舞
花も雨も月もけう　かつし筆を